

憧れを抱いて芽吹く

—— 大石真「教室二〇五号」論 ——

石 橋 剛

一．はじめに

一九五〇年代から八〇年代にかけて多くの作品を書いた児童文学者、大石真は一九二五年、埼玉県北足立郡白子村（現在の和光市白子）に生まれた。父は開業医で、自宅は医院であった。自宅は白子川のほとりにあった。その自宅から、かつて立教大学正門前にあった豊島区立池袋第五小学校に電車を通った。長じて早稲田大学に入学し、早大童話会に入会する。「坪田譲治先生の名前を会の顧問の中に見出したためである」と自筆年譜にある（大石真『チヨコレート戦争』講談社文庫、一九七七・六）。以後、坪田譲治に師事し、和光市の大和中学新倉分校で講師をしたり、出

版社小峰書店の編集部でアルバイトをしたりしながら大学に通った。大学卒業後は小峰書店の正社員となり、勤務の傍ら作品を執筆した。一九五三年に「風信器」を発表（『童苑』一九五三・九）し、児童文学者協会新人賞を受賞した。その後、一九六五年一月に『チヨコレート戦争』を刊行（理論社）、同年から翌年にかけて「教室二〇五号」を連載（『びわの実学校』一九六五・一〇～一九六八・八）している。一九六七年に小峰書店を退職して創作に専念、その後も多数の児童文学作品を発表し、一九九〇年に没した。

大石真は戦後三〇年以上にわたって数多くの幼年、少年向けの物語や伝記を発表したが、個々の作品についての詳細な研究や、その積み重ねとしての包括的な研究は未だな

されていないといえる。本稿は、大石真の代表作と目される「教室二〇五号」を取り上げて考察し、大石真作品の魅力の一端を明らかにしようとするものである。

大石真の作品に対する評価としては、たとえば以下のようなもの挙げられる。

子どもに対する徹底した共感と同化、どんなテーマを描こうとあくまで子ども自身の目と心で考えようとする。／よしんば不合理な社会に抗議する作品であっても、イデオロギーや説教をまじえず、そこに生きる子どもの生活と感情を通して、その本質に迫っていく。なによりもまず子どもの内部をとらえ、それを活写することによって、子どもを取りまく現実をたたくまじしうかびあがらせる。平明で簡けつな、心理主義ともいべきリアルな手法で描いていく。(西本鶏介「子どもへの共感と同化——大石真の作品をめぐって」『日本児童文学』一九八一・九)

その初期の作品「風信器」にすでにあらわれている特徴は、従来の生活童話に普遍的に流れていた平板な人道主義を基底とする善意の児童文学とは異質な児童文

学におけるリアリズムの確立をめざしたという一点である。(那須田稔「大石真の童話」『日本児童文学』一九七二・六)

このように、大石真作品の特徴はその独特な「リアリズム」にあると評されることが多い。そしてそれは、「イデオロギーや説教」とは無縁であり、「従来の生活童話に普遍的に流れていた平板な人道主義を基底とする善意の児童文学とは異質」なものであるとされる。こうした評価は、大石真作品に親しく接した読者にとっては何となく共感できるものと推測されるが、ではその「リアリズム」とは具体的にどのようなものであるうか。西本鶏介は別の箇所ですり平易な表現で以下のように説明している。

どんなに大切なことが書いてあっても、お説教では子供の心を打ちません。主人公の感動が、読者である子供の気持ちと一つになった時、作品は、はじめてリアリティを持つことになります。そのリアリティを生み出すために、子供と共有できる感受性、子供の視点に立てる論理性、これが大石文学の人気の秘密です。(西本鶏介「解説」、大石真『教室二〇五号』講談社文

ここでは大石真作品の最大の特長は「子供と共有できる感受性、子供の視点に立てる論理性」を有しているところに見出されている。子どもたち（子どもの読者）に「大切なこと」を伝えるための手段として、作者は「お説教」を用いないということである。そのことはまた、大石真作品において、作中の登場人物たる子どもたちが「大切なこと」に気づいたり、「大切なこと」を体感したりする過程が描かれる場合にも、「お説教」とは無関係であるということでもある。言うまでもないことであるが、「お説教」とは、子どもに対しての大人の論理の押し付けに他ならない。そしてそれは大人から子どもに向けて一方的かつ垂直になされるものである。大人が子どもの上位に存在していることを前提としてなされる行為である。「子どもに対する徹底した共感や同化」が、作品の優劣を判断するに際して「イデオロギーや説教」よりも重視されているその核心には、子どもの行動や感性、視点、主体性は尊重されるべきだという西本鶏介の考えがあることが分かる。そしてそのような価値観が、読者の側にも広く支持され共有されているところに「大石文学の人気の秘密がある」ということであろう。

大石真作品のリアリズムの成立は、作品世界と読者側との価値観の合致を前提とするものである。

このような指摘を踏まえて、実際に大石真作品を確認してみると、登場人物である小学生たちが、大人の論理の押し付けに対してまっすぐに疑問を呈し、時には反抗するといった場面がよく出てくる。たとえば初期の代表作である『チヨコレート戦争』は、町で絶大な人気を誇る洋菓子店、金泉堂と同じ町に住む男子小学生の「戦争」が描かれる物語である。その「戦争」は、金泉堂のショウウインドウのガラスが事故で割れたその原因が、実際には無関係である光一と明という二人の小学生に押し付けられそうになったところに端を発する。金星堂の主人、谷川金兵衛が無実の二人に自白を迫る場面は以下のように描かれている。

「人間だれしも、悪いことをしたときには、それをかくそうとするものじゃ。ほんとうのことをいうには、大きな勇氣がいる。だが、男子たるものは、その勇氣あるおこないをすべきものじゃ……」

光一は、いらいらした目つきで、壁の上の時計を見上げた。時計の針は、もう、五時ちかくをさしている。「きみたちはフランクリンの話をしっているかね。フ

ランクリンは、子どものとき、おとうさんのだいに
しているさくらの木を、しらずに切ってしまった。す
ると、…」

「それは、ワシントンの話でしょう」／と、小さな声
で、明がいった。

「エホン、名まえなぞ、どうでもよろしい。とにかく、
ランクリン、いや、ワシントンのおとうさんが…」

「そんなことより、ぼくたちは、家にかえらなくちゃな
らないんです。かえしてください」／たまらなくなっ
て、光一がいった。(大石真『チョコレート戦争』講談

社文庫版、三四頁)

小学生に対して告白を迫る洋菓子屋の主人の台詞はまさ
に典型的な説教である。そうしてその言葉は聞き手である
小学生の共感もひき起こすことなく見事なまでに空
転する。洋菓子屋の主人はガラスを割った犯人が光一と明
であると決めつけるのであるが、一方で二人が通う小学校
の若い女性教師は生徒の言葉を信じ、町で一番の洋菓子屋
と勇敢に対立する。

『チョコレート戦争』ならびに「教室二〇五号」、その他
の作品において、大人たちが決して悪役として描かれてい

るわけではないということは強調しておかねばならない。
大石真作品は、ともすれば大人と子どもの対立というシン
ブルな構図でとらえられがちである。たとえば西本鶏介
は、「代表作である『チョコレート戦争』にしても『教室二
〇五号』にしても、そこで描かれているのは不合理な大人
社会への抗議であり、弱者である子どもたちへの強い励ま
しである」と述べている(近代小説的リアリズムの克服
——大石真論——『日本児童文学』一九九一・三)。

しかし、『チョコレート戦争』では、子どもたちは犯人
じゃないと断言し「子どもたちの話をきけば、それが、ほ
んとうのことか、うそをいっているのかぐらいは、わたし
はわかります」と臆さずに言う若い桜井先生は無論のこ
と、小学生と対立する谷川金兵衛氏ですら決して悪役とし
て描かれているわけではない。『チョコレート戦争』の第七
章は「谷川金兵衛氏」と題されて彼が金星堂を開くまでの
ゆくたてが描かれているのであるが、そこでは東京の街角
で丁寧に靴磨きをする貧しい青年時代の金兵衛氏の姿が活
写されている。どんな仕事でも心をこめて行い、それを足
掛かりにして立身出世を遂げていく金兵衛氏の物語は、多
くの読者の胸を打つのではなからうかと推測される。ま
た、作品の後半部で、店のガラスの割れた原因は道行くト

トラックが跳ね飛ばした石によるものだとも明かされるのであるが、そのトラックを運転していた若者もまた、自分のせいで小学生が疑いをかけられているのを知るといよいよ決然として金泉堂に親告に行く。作品の掉尾は、金兵衛氏が潔く小学生に謝罪し、のみならずガラスを割ったトラック運転手の若者も許すという、たいへん爽やかな読後感をもたらすものである。「教室二〇五号」もまた同様で、作中に大人と子どもの意見の相違は描かれているものの、大人たちが子どもに敵対する存在として描かれているわけではないのである。このことに関連して、さねとう・あきは「解説」それは、〈子どもの権利宣言〉であった」（『大石真児童文学全集 第2巻 教室二〇五号』ポプラ社、一九八二・三）の中で、以下のように述べている。

ここで一つ注意しておかなければならないことは、「教室二〇五号」は大人への反抗を描きながら、子どもは善で大人はすべて悪だと、単純に割り切るようなことは絶対にしていないことです。たとえば、洋太の家にいってもたらされた洋太の父の苦悩も、かなりの紙数をつかってキチンと描いています。大人には大人の条理があり、子どもには子どもの条理がある。この

条理と条理のぶつかり合いに、大石さんは痛みと悲しみにみちた眼差しをふりむけているようです。

少年は、このような痛みをこらえて、子どもの成長を大人もまた、同様な痛みをこらえて、子どもの成長を見守るのです。双方のリアルな心情を妥協なく活写して、大石さんは、生きることの悲しさすら言外に訴えているようでもあります。

「教室二〇五号」についての詳細は後述するが、右に挙げたように、大石真作品が子どもと大人を描くにあたって善悪の対立の図式を用いていないことは、その特長を論じる上で注意されるべきである。

大石真作品における「リアリズム」とは、子どもたちの日常生活（主に学校や家庭）を作品舞台とし、子どもの行動や感性、視点に寄り添った語りを展開していき、そうした特徴によって読者の共感や感動をひきつけるものであると、一応はまとめることができるだろう。しかし、児童文学として読者の共感や感動をひきつけるためには、健全なモラルや道徳観の裏打ちが必要とされるのではなからうか。『チョコレート戦争』の桜井先生や谷川金兵衛氏、トラックを運転する若者の言動には、正直さを善とする姿勢

や、人間の善性を認め肯定する認識が間違いなく存在している。

だとすると、先に挙げた「従来の生活童話に普遍的に流れていた平板な人道主義を基底とする善意の児童文学とは異質な児童文学におけるリアリズムの確立をめざした」という大石真評は本当に妥当なものなのであろうか。ここで簡単に「従来の生活童話」について確認しておきたい。大石真作品の本質は「従来の生活童話」の特徴と決して無関係ではないと推察されるからである。

鳥越信編『鑑賞 日本現代文学 第35巻 児童文学』（角川書店、一九八二・七）所収の鳥越信「児童文学・創設」によれば、「生活童話」は、「一九三五年前後から戦後十数年くらいの間、日本の児童文学に大きな地位を占めていた」とされ、その特徴については以下のように解説されている。

生活童話の特色は、空想的物語ではなく日常的物語の形をとったこと、その素材・テーマの点で、例えば貧しさということに疑問を抱く子ども、労働ということの意味を見出そうとする子ども、子ども同志の連帯によって事にあたらうとする集団、などの広がりを見

せたことで、一口にいえば社会的な問題をリアルに描き出そうとした点にある。

したがって必然的に生活童話は子どもの実生活に密着し、子どもの心理や行動をヴィヴィッドに描写することに力を注いだ。そうした意味でのリアルな作品群の頂点に立つのが、善太・三平ものでしられる坪田譲治である。

同書は坪田譲治こそが「リアルな作品群」すなわち「生活童話」の「頂点」であると位置づけている。その坪田譲治を慕って児童文学創作の道を歩き始めた大石真もまた、その影響を受けたと考える方が自然であろう。「例えば貧しさということに疑問を抱く子ども」が描かれるところに「生活童話」の特徴があると右に挙げた箇所所述べられているが、大石真の初期の短篇「風信器」には以下のような子どもの詩が挿入されている。

ある夜、ぼくが勉強してたとき
なんぞ、こんなにくろうするだか、
といて、かあさんが泣いた。
おじいさんは、だまっていた。

タツオはねていた。

アキはかあさんの乳のんでた。

ほんとに、なんでこんなくろうするんだか。

ちっとも悪いことせんに。

以上は「風信器」に登場する貧しい小学生、江藤弘の書いた詩である。「風信器」は弘の同級生である「ぼく」によって語られていくのだが、「ぼく」は、独りで学校の風信器を眺める弘が「とても好きになって」しまう。そんな「ぼく」と弘のやりとりを通じて「貧しさということへの疑問」が表現されているのである。また、「教室二〇五号」以後に書かれた短篇「パパという虫」(『日本児童文学』一九七五・一)は「労働ということに興味を見出そうとする子ども」が語り手である。このように見てみると、むしろ大石真は「伝統的な生活話の流れをくむ作家」であり、「生活話の童心主義的リアリズムを近代小説的リアリズムに近づけた技巧派の作家ということができません」(西本鶏介「解説」子どもの内面に密着した文学」『大石真児童文学全集 第1巻 風信器』ポプラ社、一九八二・三)という見方の方が大石真文学の本質に近いと考えられる。

本稿は「教室二〇五号」を考察対象にして、先に述べた

ような大石真作品の特長をより精細に明らかにしようとするものである。同作は「ドラマチックな場面展開、くつきりとした子ども像、豊かなストーリー性と社会性、卓越した描写力、この『二〇五号』には大石真のすぐれた個性がほとんど集約されているといつてよいだろう」(前掲、西本鶏介「子どもへの共感と同化」と評価される作品である)。

結論を先に述べてしまえば、「大石真のすぐれた個性」は、子どもたちの健全な「憧れ」を描いているところに見出すことができる。作中の子どもたちは、自らを取り巻く環境に、時に反抗し、疑問を抱きながらも、自己の限界を悟り、大人の世界への「憧れ」を原動力に成長を遂げているのである。大石真作品では、「グングン読者を引き込むような話」(作家に聞く(その2) 大石真氏 ぐんぐん引きこむストーリーを)『日本児童文学別冊 児童文学創作入門』一九七九・八)の構築によってその過程が描かれており、そのようにして読者の共感や感動を得てゆくところに独自のすぐれたリアリズムが存在するのではなからうか。以下、「教室二〇五号」を検討しつつ、そのことを論証していきたい。

二・秘密の地下室と四人の小学生

「教室二〇五号」は小学校を主な舞台とした作品である。主要登場人物は小学校六年生の洋太、友一、健治と二年生の明である。

五時間めがさいごの授業で、体育の時間だった。

体育の福田先生から、とびばこの用意をするように、という命令がつけられた。(中略)／「やれやれ、かつたるいなあ」十人ばかりのその日の当番は、いかにもめんどくさそうに顔をしかめ、ぶつくさとお不平をいった。／(中略)だが、じっさいには、口でいうほど、その仕事がいやだったわけではない。いちおう、ぶつくさいってみるほうが、上級生らしく、貰禄があるように見えるので、そういつてみたまでのことだ。(講談社文庫版、以下同、七頁)

以上が冒頭部である。この作品は三人称体で進められていく。右にあげた冒頭部からも分かるように、同作で使用される語彙はもちろん児童文学向けであるが、だからといって子どもの内面描写までが単純化されているわけでは

ない。上級生らしさや貫禄を気にする心の動きが簡潔な文章で表現されている。

続いて優等生で足の不自由な友一と建治の喧嘩が起り、喧嘩に負けた友一が物置の床下に地下室のような空間を発見する。ここで読者に初めて秘密の地下室の存在が明かされる。そこにはすでに二年生の明がいて、さらには同じクラスの洋太も現れる。物語の設定では、まず最初に洋太が地下室の存在を知っており、それを洋太が明に教えた、という順序になっている。直後、友一のことを心配して探しに来た建治も地下室の存在を知るところとなり、このようにして学校の地下に誰も知らない空間が存在するという秘密を四人で共有することになる。四人はその後、この地下室を教室二〇五号と名付け、これが作品のタイトルとなっている。

しかし四人はそれぞれ、もともと仲が良いというわけではなかった。教室二〇五号という場を発見し、共有することを契機にして、仲よくなり、絆を深めてゆくのである。特に優等生である友一と、体育は得意だが勉強のできない健治は、作品の冒頭部ではお互いに反目しあっている。そのことは先にも述べた通り、二人の喧嘩の場面が描かれていることでも分かる。しかし、ここで注目しておきたいの

は、喧嘩の場面の以下のような文章である。

健治は手をのばして、友一のからだをさぐった。あた
たかいそのからだだが、ヒクヒクふるえていた。泣いて
いるんだな、と健治は思った。／すると、もう健治は、
すまない気持ちで、胸がいつぱいになってきた。(一三
頁)

「教室二〇五号」の作中の季節は冬である。そして同作に
おいては、あたたかい／つめたいという表現が子どもたち
の心情を表現する上で、きわめて効果的に用いられてい
る。ここでは、喧嘩に勝った健治が、冷静になり友一を心
配し、友一の悲しみを感受して「すまない気持ち」になっ
てゆくその心の動きが描かれている。友一の体のあたたか
さが、健治の心にもしみわたってくるのである。

足の悪い友一と健治の喧嘩は、健治が友一に「びっこ」
という言葉をおぼつけたことから始まる。友一だけでなく、
教室二〇五号に集う洋太、明もまた、それぞれの事情や深
刻な悩みを抱えている。たとえば友一の悲しみは以下のよ
うに描写されている。

友一は、今年の運動会を思い出した。運動会には、
この五人ばかりのげたをはいて、「地上ヨットレース」と
いう競技をした。だが、足の悪い友一は、その競技に
参加しなかった、ラインのむこうで、友一は、みんな
のする、この愉快的な競技をながめていただけだっ
た。／(中略)いろいろな道具に手をふれてみる。す
ると、そのたびに、友一の胸に、それらの道具から、
のけものにされた、自分のみじめなすがたがうかんで
くる。ぼくと関係のない、いじわるな道具たちめ。(一
五頁)

「のけもの」という言葉に端的に表されているように、友
一は優等生ではあるが、足が悪いために強い疎外感を感じ
ている。右のような悲しみを抱えている友一ばかりでな
く、洋太もまた実の母親との死別を経験し、その後、自分
の父親とその再婚相手の新しい母親とも上手くいっていない。
二年生の明もまた両親の帰りが遅く、アパートの部屋
で夜まで一人で過ごす毎日を送っている。

秘密の地下室は、そのような彼らが憂鬱の多い日常生活
から一時逃れる場所としてかけがえのないものになってい
く。四人は秘密を共有する者同士として仲よくすることを

誓いあい、絆を深めていく。地下室は単なる秘密基地というわけではなく、あたたかい連帯感を希求する小学生たちにとって心の隙間を埋める場所ともなっていく。

洋太は四人の「約束」として、「一、おたがいにたすけあい、なかよく勉強していこう／二、おたがいに勇気をだし、正しいことをおこなおう。／三、おたがいに明るく、強いからだをきたえよう」（七七頁）ということを提案する。これはどの教室にも掲げられている「みんなの誓い」であるが、洋太は教室の標語は「みんなが知っているけれど、だれも実行なんかしていない」と言い、地下室では本当にその通りに実行するべきだと主張する。そのような洋太の主張の芯の部分には以下のような思いがある。

おとなとは、いつたいなんだろう。洋太には、おとなのすることが、なんだか、さっぱり、わからなくなってきた。／なにもかもが、でたらめで、いいかげんで、自分かつてのように思えてならなかった。／そして、がまんがならないのは、そのおとなたちが、いばりくさった顔をして、子どもたちをしかったり、お説教したりすることだった。／洋太は、そんなおとなたちを、なんとかして見かえしてやりたかった。お

となたちのできないことをして、おとなたちを、あつといわせたかった。／（中略）へそうだ、ここに、ぼくたちの力で、学校の、どの教室にもないような、すばらしい教室をつくってみたら――／洋太は、そう考えた。（八三～八四頁）

こうした考えを持つ洋太が主導して秘密の地下室が形作られていく。秘密基地を連想させる空間は、多くの子ども読者たちの興味や羨望を喚起したことであろうと想像される。教室二〇五号は、それぞれの悲しみを抱えた小学生たちが、憂鬱の多い日常生活から一時逃れることのできる場所だと先に述べたが、そのような秘密の地下室を物語の中心に据え、一つの非日常的な場として提示しているところにこの作品の大きな特長があると考えられる。

三・物語が集結する場としての教室二〇五号

「教室二〇五号」のあらすじを単純かつ乱暴にまとめれば、「小学生たちが地下室を発見して秘密を共有し、自分達だけの新しい教室を創ろうと考えるも成功せず、結局地下室を出て現実の世界に踏み出していく物語」であるということが出来るだろう。そしてそのような本筋は、い

くつもの細かいストーリーが集合することで形成されている。主要登場人物である四人の小学生に関するそれぞれのエピソードが並行して語られてゆく。そのような挿話を物語の流れに沿って挙げると以下の通りである。

- ・友一と建治がケンカをする。友一が地下室を発見する。
- ・洋太が街で中学生に万引きを強要されそうになった小学二年生の明を助ける。
- ・洋太は父親の再婚相手である優しい新しい母親に馴染むことができない。そのことで父親との関係も悪化している。
- ・自分の足のことで悩む友一の悲しみが描かれる。
- ・友一に洋太と建治がとびばこを教える。友一は見事にとびばこを飛び越える。
- ・友一が算数の苦手な明に地下室で算数を教える。
- ・算数のテストで百点をとった明は母親の勤め先に答案を見せにいくも、想像と違って喜んでもらえず、その帰り道に車にひかれて死んでしまう。
- ・友一の父親に失業の恐れがあり、学費の高い私立の中学への進学を目指す友一は悩む。
- ・父親と激しく言い争った洋太は、父親から出ていけと言われ家出することを決意する。

・洋太は、家庭や受験のことで悩んでいた友一と共に地下室で一晩過ごすことを決意する。

・暖かくて立派な建治の家の様子が述べられる。

・洋太と友一が地下室に泊まる。しかし、地下室での一夜を楽しむことができない。

・友一、洋太の父や担任の教師といった大人たちが二人の行方を一生懸命に探す。

・建治から親や先生のみならずクラスの皆が心配していることを聞いた二人は地下室の外へ出ていく。

「教室二〇五号」のあらずじに従ってそれぞれの挿話を並べると右のようになる。そしてここで特に強調したいのはそのエピソードの全てが、教室二〇五号という場に関連づけられるものであるということである。先に挙げた喧嘩の場面のほかにも、たとえば小さい明を不良の中学生から守る勇敢な洋太の行動も、その後で地下室の存在を明に教えるという点で教室二〇五号につながっている。健治や洋太が友一にとびばこを教えるということも地下室で決められるし、友一が明に算数を教えるのも地下室の中である。物語の後半部で家出をする洋太と友一が泊まるのももちろん教室二〇五号である。四人が集合する教室二〇五号は、言い換えれば四人それぞれの物語が集結する場でもある。

「教室二〇五号」の大きな特長として、秘密の地下室という非日常的な空間を設定し、そこをさまざまな物語が交わる場所として表現している点があることを強調しておきたい。ここに同作のフィクションとしての特徴があるといえるよう。

そして右に挙げた挿話のうち、特に注目したいのは、とびばこに挑戦する友一の成功の物語と、明の交通事故による死である。この二つの挿話は、ストーリーの流れを大きく変えるポイントであると位置付けることができる。そしてこの二つのポイントは、物語の大きな転換点にふさわしく、多くの読者の興味を物語世界に惹き付ける役割を果たしたであろうことが想像される。

まず友一のとびばこへの挑戦と成功は、教室二〇五号の存在が四人の物語が集まる場所としてより確かなものになつていくための転換点である。建治と洋一が友一にとびばこを教え、友一も努力で応え、とびばこが飛べるようになるという一連の流れは、先に挙げた四人の約束を実行し実現させるものに他ならない。四人の約束が実現されることによって、教室二〇五号という場所はその存在感を強めていくのである。

実際に友一の挑戦と成功のあとにおける地下室の様子は

以下のように描写されている。

友一が明に算数を教えはじめたころから、地下室のようすは、以前とちがって来た。(中略)／地下室が、だれの命令というわけではなく、整頓され、美しくなつたのは、四人がこの地下室に愛情をいだきはじめた証だつた。(二〇五頁)

このように、友一の挑戦と成功によつて「教室二〇五号」がその存在感を強めていったことが分かる。さらに子どもたちは、自分達だけの教室をより確固たる場所にしようと考えて、次には友一が明に算数を教えることになる。しかしこのことが悲劇を生んで、明はテストで百点を取るものの車にはねられて死んでしまう。四人のうちでもっとも若い明の死は、多くの読者の驚きや悲しみを喚起したと考えられ、ストーリーの流れの中でも最大級に際立つ箇所だといつてもよいであろう。

しかし、注目すべきは、明の死の後では「快適な自分たちの集合場」(二〇五頁)であつた教室二〇五号がそうではなくなつてしまうことである。いわば、教室二〇五号という場所が変質してしまうのである。

つぎの日、授業がおわると、友一は地下室に通じるものおきにはいつていった。(中略)／とつぜん、友一は、おかしな考えにおそわれて、ギクリとした。このまっ暗な地下室のどこかに、吉川明が、息をひそめて、じつと、自分のくるのをまちかまえているような気持ちで、クスクスわらいながら、つくえの下かなにかにかくれてる。そんな、いたずらな明のかっこうが、友一には、目に見えるようだった。／友一は、きゅうに、恐怖でからだがふるえだした。(二二七頁)

まったく、こんな陰気なふんいきで、三人がこの教室二〇五号に集まったことが、これまでであったろうか。／口にだしては、だれもいわなかったけれど、それは、みんな、明がいなくなったためのような気がしてならなかった。／明は、このグループの中で、一人だけ、ちびっ子の二年生だった。いても、いなくても、いいような存在だった。いや、いつも、じゃまになり、足手まといになるような存在でしかなかった。／それなのに、その明がいなくなると、地下室は、みようにさびしく、陰気な、ただのあなぐらにかわつ

てしまったように思える。(二三四頁)

唐突な明の死によって、教室二〇五号は安住の場所、理想の場所ではなくなってしまう。それどころか死の雰囲気、満ちた墓場のような不気味な場所になってしまう。洋太たちにとっては無限の可能性に満ちた場所であるかに見える教室二〇五号は、急速にその輝きを失ってしまう。このように明の死は物語の転換点となっており、作品全体の構成上、三人の小学生たちが地下室を出て外の世界と向き合っていく大きなきっかけとして用いられている。

四・子どもの世界の果てと憧れの光

「教室二〇五号」ならびに他の大石真作品を大人対子どもという単純な構図でとらえることはできないということ、は先に述べた通りである。しかし、この作品の優れた特徴として忘れずに指摘しておきたいことは、この作品には子どもの視野、子どもの認識の限界がしっかりと表現されている点であろう。たとえばそれは明の死を通して描かれている。

明が死んでしまったのに、こうして、二人が歩いて

おり、いつもとおなじように自動車走り、街には、人びとが歩き、どこからか、陽気な音楽がきこえてくるのがふしぎだった。／＼といった、死んだ明は、どうなってしまうのだろう……。わからない。おそらく、だれにきいたって、わかるはずはないのに、きまつているのだ。(一一七頁)

明は、いなかった。どこにも、いなかった。――そのあたりまえのことが、おごそかな真理のようにひしひしと、友一には、感じられた。死んだものは、二度とあられることはないのだ……。／＼(中略)／＼考えると、わからないことばかりが、つぎつぎと、友一の胸におしよせてきた。(一一八頁)

明の死は、友一にとってきわめて恐ろしく不条理な出来事にほかならない。それはこの作品を読む子どもの読者にとってもまた、同様であるだろう。右に挙げた箇所では「わからない」という言葉で友一の戸惑いが率直に表現されているが、他の箇所ではそれとは異なる方法で子どもの認識の限界が描かれている。

なんという、かわいそうな子だったろう、洋太は……。ふいに、つきさすようなすうどいかなしみが、俊一の胸をつきあげてきた。／＼そんな俊一の目に、駅まへのにぎやかな灯が、かすんで見えてきた。

〈洋太、洋太、おとうさんが悪かった。帰ってきてくれ。〉俊一は、できるならば、町じゅうにきこえるような大声で、さげびたかった。(一一八六頁)

以上は家出をした洋太を探す父親の心情の吐露である。ここでは子どもと同様に大人の認識不足も示されており、先に挙げたような大人と子どもの対立の構図は当てはまらない。しかし注目したいのは、涙を流すまでに心配する父親の心情は洋太には見えておらず、読者にだけ知らされているという語られ方である。作中において洋太は、父親の率直な気持ちを知ることはない。言い換えればそれは、教室二〇五号を出る洋太を暖かく待ち受けるものとして用意されているのである。

さらに子どもから見える大人の挙動や世界が次のように描かれていることは特筆すべきであろう。たとえば友一の挑戦の場面には以下のようなくだりがある。

みんなは寒さもわずれ、息をのんで、友一に注目した。／友一の顔は上気し、赤くなっていた。四段のとびばこをこえられたことで、胸はよろこびと得意の鼓動を、コトコト鳴らしていた。／その手のひらは、とびばこの表面にこすれて熱くなっていた。ふいに、それが友一に、父のせなかをおもいださせた。(一〇〇頁)

友一は、学校では洋太や健治にとびばこの飛び方を教えてもらいながら、家では父親の背中をとびばこに見立てて練習を繰り返す。その父親の背中あたかさが、とびばこのテストの時に実感を伴って思い出されてくる、という箇所である。それは友一にとっては自らを支えてくれるものとして実感されたのではないだろうか。

他にも体育を教える福田先生の、寒風をものもしない態度への子どもたちの憧れが「福田先生ってやつぱりすてきだな」と真っ直ぐに表現されている箇所(九六頁)もある。友一の成功を喜ぶ健治に至っては、福田先生への憧れを率直に語る。

「ほんとうに、大成功だったな。福田先生ったら、おれ

に、『おまえ、優秀な体操の先生になれるぞ』って、いったものな。おれ、それきいて、ほんとうに考えちゃったよ。おれも、福田先生みたいな先生になりたいってな――

「そりゃあ、なったらいいじゃないか」／と、洋太は、チョコレートの銀紙をむきながら、けしかけるようにいった。(一〇一～一〇二頁)

このように語られる子どもからの大人たちへの憧れは「教室二〇五号」を考察する上で特に強調されてよいであろう。友一もまた、クラスメートである藤村さんのお父さんに憧れており、事故に遭った明を見舞うために駆け付けた病院の屋上で洋太に向かって、「大きくなったら、そして、もしできることなら、藤村さんみたいなお医者さんになりたいんだ」と語る(一二五頁)。そのように語る友一の胸の底には、「ぼくが、五つのおときさ。ぼくは小児マヒだったんだ。でも、その病院の先生がじょうずな先生だったから、ぼくの足はかるくてすんだんだ」(一二四頁)という体験がある。

とびばこの苦手な友一に熱心に飛び方を教える健治の行動も、勉強に熱心に取り組み、明に親切に算数を教える友

一の行動も、体操の先生や立派な医者への憧れにつながっているのである。「教室二〇五号」の子どもたちは、自分で取り巻く世界の明るい側面をしつかり見つめ認識しているといえるだろう。では、洋太の場合はどうであろうか。洋太が地下室で過ごす場面には以下のような箇所がある。

あらけずりの板の天井に灯影があたり、板の凹凸が、ふしぎな彫刻のように見える。／それは、どうかすると、洋太の死んだ母の顔のように見え、また、ニヤツとわらった吉川明の笑顔のようにも見える。／二人とも死んで、もういない——と、ぼんやり、洋太は思った。いくらあいたいと思っただって、もう、あの二人が二どとぼくのまえにあらわれることなんかありやしないのだ。(中略)

ほっとしたとたん、洋太の胸にあたらしい母親の顔がうかんできた。洋太には意外だった。まだ、洋太が一どもおかあさんとよんだことのない母親の顔が、まるで洋太のよびかけにこたえるように、うかんできたのだった。／その顔は、いつも洋太に話しかけるときに見せるように、口のはたに微笑をうかべている。その顔が、いまの洋太にとっては、いいようもなくなつ

かしかつた。(二〇一〜二〇三頁)

家出を決行した洋太と友一は、教室二〇五号で冬の一夜を過ごすものの、寒くて怖いばかりで全く楽しむことはできない。その様子はわびしい食事のシーンに端的に表現されている。

「さあ、夕ごはんにしよう——」／と、洋太がいった。

二人は地下室にもどり、紙ぶくろからコッペパンをとりだしてつくえの上においた。それから、コロツケを四コと牛乳二本を、そのとりにならべた。それが、地下室での最初の食事だった。

二人は、寒さにふるえながら、このつめたい食事を、だまっていた。腹はすいているはずなのに、この食事は、すこしもうまいとは思えなかった。ぼろでもかむように味気なかった。(一七三〜一七四頁)

さみしさ、わびしさの塊のようなつめたい夕飯を口に運びながら洋太は自分の家の「湯気のたつ白いごはん」と、あたたかいおかず(一七四頁)を夢想する。そのあたたかい自分の家のイメージは、新しい自分の母親につながって

る。以下は洋太が風邪をひいて寝込んでいる様子が描かれた文章である。

「どう、気分は……」／いいながら、洋太の母親がはいってきた。洋太はからだをかたくして、ねむったふりをした。母親の手が、そと洋太のひたいにふれた、ふとった、あたたかい手だった。

よしてくれよう、はなしてくれよう。／洋太は心の中でさげんだ。

だが、その手は、なかなか洋太のひたいからはなれようとしなかった。洋太のひたいに手をあてながら、母親は、じつと、洋太の寝顔を見つめているようだった。それがまぶしくて、洋太は、さらにきつく目をつぶった。(三四頁)

洋太の母親の優しさは作品の前半部において既に読者の前には提示されているものの、洋太はそれを頑なに認めることはなかった。しかし洋太は、明の死によって変質してしまつた地下室で、寂しく惨めな一夜を過ごすことで母親のやさしさに気づくことが出来るのである。先に挙げた箇所からも読み取れるように、洋太の母のやさしさ、あたた

かさは不気味で不条理で恐ろしい死のイメージとは対極にあるものとして洋太に実感されていることが分かる。物語の流れに即していえば、明の死に直面した洋太は、そのことによって母親のあたたかさを素直に受け入れることができるようになっていくのである。このようにそれまで認識できなかった現実や大人の世界のあたたかさを発見していくというかたちで、洋太の成長が極めて印象深く描かれているのである。

「教室三〇五号……」／洋太は口の中で、つぶやいた。なにかが、洋太の胸の中でくずれおち、それにかわって、力強いなにかが芽ばえていくのを、いま、洋太は全身ではつきり感じとっていた。ほこりくさい運動具のあいだをとおって、ものおきの戸を力いっぱいおしあけると。いきなり目のくらむような光が、洋太におそいかかってきた。／洋太は、はげしくまばたきし、それから、はじめての世界でもながめるように、大きく息をついて、光にみちあふれた朝の学校をながめまわした。／そのとき、階段から、はじけるような喚声がわきおこり、四、五人の一年生が、口ぐちになにかさげびながら、洋太のまえをかけぬけ、雪の校庭

にとびだしていった。(二二五頁)

以上がこの作品の掉尾である。建治から皆が心配しているというのを聞いた洋太と友一は地下室を出て朝の校庭に踏み出していく。満ちあふれる朝の光が激しく二人を照らすという描写によって、二人の前途が決して暗いものにはならないということが分かりやすく示されているが、その光はまた、二人を取り巻く世界の明るい側面を、強い輝きを表しているのではなからうか。「力強いなか芽ばえていく」という文章によって、地下室にはいる前と後で洋太の世界のありようが大きく変わったことが分かる。つまり洋太はこれまで見えなかつた父親や母親の思いを認識できるようになったのだが、それが死の雰囲気になった地下室で見出されていることも重要である。なぜならそのことによって、大人の優しさが、子どもたちが孤独や不条理に立ち向かうための拠り所として描かれていると解釈することも出来るからである。一年生の元気な躍動感あふれる様子も、暗い地下室の世界の対極にあるもの、生命力みなぎるものとして読者に鮮烈な印象を残すであろうと考えられる。

この作品におけるリアリズムは、子どもの疑問や反抗心

を率直に描き出すとともに、子どもの認識の限界をも表現しているところに認められる。そして子どもの世界の果てにしつかり成長が用意されていることも見逃してはならない。この作品の子どもたちは、それぞれの胸に憧れを抱きながら大人の世界の、明るいあたたかい部分を認識することで成長を遂げていくのである。

・本稿は二〇一八年度日本語文学会秋季学術大会（於、韓国、ヨソナム大学、二〇一八年一月二四日）における口頭発表を基に作成したものである。

（テグカトリック大学助教授）